

10/20「路上表現」主催者あいさつ

今日は、ご多忙な中、私たちの企画する「路上表現」にご参加いただいたことに、まずお礼を申し上げますと共に、今回の「路上表現」を企画した私たちの思いについて、一言お話したいと思います。

日本国家の「尖閣国有化」以降、この国では、一昨年（2012年）の尖閣周辺海域での「中国漁船衝突事件」の時以上の強硬な領土ナショナリズムが台頭し、日本国家の「主権の危機」を訴えるような言説がマスコミでは飛び交っています。

しかし、多数の人々の不安や反対の声を踏みにじって、老朽化した原発を「再稼働」させ、墜落事故を繰り返すオスプレイ機を強行配備したことにも現れているように、今、この列島社会に生きる私たちが直面しているのは、「国家の危機」ではなく、「日本国家という危機」そのもの、つまり、この国家によって私たちの生きることの根底までも脅かされ、侵害されているという事態のほうです。

そのように、「国家の危機」という言葉が横行することで、この日本国家による私たちの生きることへの侵害がきちんと問われなくて済まされようとすることに対して、私たちは、大きな憤りを禁じえません。その一方で、「尖閣」をめぐる日本と周辺（中国）の国家間の対立が、とりわけ、中国の民衆からの日本を生きる私たちへの怒り・敵視という民衆間の分断・対立として表現されていることに対して、私たちは悲しみとやりきれない思いを感じています。

60年代末まで、「尖閣」周辺の海では、沖縄の漁民と台湾の漁民のそれぞれが船を浮かべて漁をするという風景が日常的に見られました。そのように、アジアの海がアジアの民衆の交通・交流の場として開かれていた歴史的経験を想起しながら、国境を越えた民衆同士の連帯を通じて、今後の東アジアのあり方を生み出したい。そのことを通じて、一方では、領土ナショナリズムを振りかざし、他方では、私たちの生きることの根底までも容赦なく侵害してためらわない、この日本国家のあり方をこわしたい。

そのように、この列島社会を生きる私たちが、日本国家の「構成的」解体を進めるものとして、いかにアジアの人々の前に立ち現れることができるのか。今、そのことが切実に問われているように思います。

このような思いから、私たちは、今回の「路上表現」を企画しました。

今日は、ぜひ、そうした大きな思いで、皆さんと共に、富山の街頭で声を上げていきたいと思っています。